

# 水の哲学

じゅんし  
荀子

## 「君は船なり庶人は水なり」

荀子は紀元前の中国・戦国時代の儒学者。孔子の教えを受け継ぎ、学問の目的は「礼」を学ぶことにありと説いた。礼儀ある態度を重んじる「礼」は諸個人の私的な欲望を規制する政治の最高原理でもあり、ルソー、ロック、ホッブズなどの社会契約説にも通じる近代性をそなえた思想家として評価されている。

また荀子の近代性は「天」も自然現象であるとして「天」が占いや祈祷に呼応して吉兆・禍福・超常現象をもたらすという神秘的な天人相関思想を全面否定した。その意味でアリストテレスなど古代ギリシャの自然哲学派にもつらなる透徹したリアリストだったといっていだらう

### 船は水に守られ、水は船に守られる

「君は船なり 庶人は水なり」は荀子の著作を整理した『荀子』第20巻の王制篇に出てくる。正確にいうと、このあと「水はすなわち船を載せ、水はすなわち船を覆す」という言葉がつづく。

「君」は君主、「庶人」は庶民のことで一般的に君主の悪政を戒める格言として理解されている。つまり君主という「船」は庶民という「水」に支えられて安泰な航海をすることができる。だから庶民という「水」を侮ったり、おろそかにしたり、虐げたりすると「水」はいつしか氾濫し、君主と

いう「船」を転覆させてしまう。古代から連綿とつづく政治の歴史を省みると荀子の箴言が普遍的な真理を突いていることは明らかだ。

もちろんここでいう「船」と「水」はさまざまなケースに応用することができる。会社でいうと「船」は経営者、「水」は社員ということになるだろう。「船」と「水」は一方通行の関係ではなく、相互がうまく補完的に機能することによって快適な航海を保証する。「船」は「水」に守られ、「水」は「船」に守られるという打てば響く共振関係が理想的な姿かもしれない。

### 水は方円の器に随う

荀子にはもうひとつ「水は方円の器にしたがう」



という有名な格言がある。一般的にこの場合の「水」は人間、「方円の器」は人間をとりまく環境と解釈されている。ストレートにいうと人間性というものは環境によって規定されるということだ。環境には家庭環境、教育環境、職場環境などさまざまなケースがある。荀子はこうした重層的環境のなかで一貫して「礼」を学ばせることによってはじめて人間は善性を身につけると考えた。ここでも冷徹なリアリストとしての荀子の素顔を見ることができるだろう。

これに加え「水は方円の器にしたがう」という言葉には良い意味で水のしなやかさが表現されている。水は丸でも四角でも三角でもあらゆる器に適應する。水を人間に置き換えると「方円の器にしたがう」は人間の柔軟性・協調性・適應性を示したものと読み解くことができる。もとより水は私利私欲にこだわるような自我をもたない。荀子の理想とした非利己的な人間像が水に象徴されているようだ。

### 性善説と性悪説

荀子は人間性悪説の提唱者としてもよく知られている。それで孔子に次ぐ儒教の主流派で性善説を唱えた孟子をきびしく批判した。

だが荀子と孟子の思想的立場が正反対かというところほど単純ではない。もともと孟子は人間がそのままの姿で善であると説いたわけではない。人間は潜在的に善性をそなえているというのが孟子の考えだ。だから孟子も孔子の<仁義礼智>な



どによる教育の必要性を否定しない。

これに対して荀子は人間の本性を悪と見做した。人間は際限のない利己的存在であるからこそ「礼」を学ぶことによって後天的に善性を体得すべきだと主張した。

こうしてみると荀子も孟子も人間教育の不可欠性を説いている点では変わらないのだ。異なっているのはその方法論といていい。人間の善性に期待する孟子に対して荀子は人間の悪性を制御しようとする立場に重心を置く。試行錯誤を繰り返している現代の教育論も突きつめると両者のいずれかの立場に収斂されるだろう。(高倉)

### 参考文献

- 『荀子』 岩波文庫
- 『荀子』 中央公論社
- 『荀子考』 文芸社ビジュア
- 『荀子のことば』 斯文会
- 『孟子』 岩波文庫

